

第 15 回卒論・修論研究発表セミナー 研究発表・ポスター発表 要旨

午前の部 卒業論文研究発表		①9:50~10:15 ②10:20~10:45 ③10:50~11:15
【第 1 室】 (142) テーマ: 語彙学習・動機づけ		
① 偶発的語彙学習を用いた SNS の効果 - Twitter における単語学習を通じて -	渡邊 匠 (大阪教育大学)	携帯電話のアプリやゲームを用いるなど、電子機器を用いた様々な英単語学習法が開発されている。その中で、ここ数年の間に世界的に普及しつつある SNS。そんな SNS での英単語学習に注目。英単語学習用のアカウントを Twitter のユーザーが利用する。その記録や調査票の回答の考察から、Twitter による偶発的語彙学習が「学習スタイルをどう変えるのか」、「学習への動機づけはあるか」、「どんな影響があるか」などの効果についての研究。
② 問題解決タスクのディスカッションにおける偶発的語彙学習の効果	中田 絢子 (京都教育大学)	本論文の目的は、問題解決タスクのディスカッションにおける、偶発的語彙学習の効果を調査することである。大学生 51 名を対象に、タスクのディスカッションに参加する実験群と、タスクと同様のテキストを読み、内容理解問題を解く統制群に分け、目標語の受容・発表語彙知識を問うテストを実施した。発表では、グループ間で目標語の知識に統計的な差があったか、また質的研究の面から実験群の発話にどのような特徴が見られたかを発表する。
③ 日本の EFL 学習者の動機づけの高さと志向性に教師が与える影響	白石 彩乃 (同志社大学)	本研究では、自己決定理論を用いて教師が日本の EFL 学習者の動機づけの高さと志向性に与える影響について質的に考察した。アンケートで選出された 3 名に半構造的インタビューを行った結果、教師が学習者の動機づけの高さや志向性の変化に与える影響の度合いは学習者の志向性によって変化していたことが分かった。教師が学習者の期待やニーズを理解し満たすことが出来ていること、また授業のみでなく、教室外での教師のサポートや指導が学習者の動機づけに影響を与えることが示唆された。
【第 2 室】 (143) テーマ: 教師論		
① 中学校英語授業における教師による英語使用の様態	川原 未来 (大阪教育大学)	この研究は、中学校英語教師へのインタビュー、中学生へのアンケート調査を通して、中学校英語授業における効果的な授業構成や生徒の理解を最大限に引き出せるような指導方法を探ることを目的としている。教師に対するインタビューでは、授業中における英語と日本語の望ましい使い分けについての教諭らの考えを明らかにした。生徒に対するアンケートでは、中学生が英語の授業に対してどのような印象をもっているのかを明らかにした。

② good teacher に見られる誤りの訂正	藤本 理沙 (大阪教育大学)	教師と生徒の信頼関係を築くための様々なアプローチがあるが、今回の論文では誤りの訂正に焦点をある。2000年にパーマー章を受章された、姫路市立豊富中学校の稲岡章代先生の授業を観察させていただき、稲岡先生の行っている誤答訂正の方法を分析させていただいた。また、稲岡先生へのインタビューをもとに、教師は「いつ」、「どの誤りを」、「どうやって」訂正するのがよいかについてのモデル案を検証する。
③ 日本の小学校外国語活動における児童の発話を引き出すティーチャー・トーク	辻 美有紀 (京都教育大学)	本論文は、小学校外国語活動において教師はどのように児童の発話を引き出しているのかを分析することを目的とする。分析方法として、Walsh (2006)のSETT処理に基づき、日本の小学校外国語教育に適応した筆者独自のSETT処理モデルを考案した。このモデルを用いて分析した、日本の小学校11校、15クラスにおいて使用された談話モードの分類と使用状況、また各モードにおける児童の発話を引き出すための工夫を発表する。

【第3室】(152) テーマ: 小学校外国語活動		
① Effects of Project Style Methods in Elementary School -Through Drama Activity in Miwa Elementary School-	的場 雄樹 (奈良教育大学)	本研究では、小学校6年生を対象とし、プロジェクト型カリキュラムの一つである「英語劇」を実施し、その結果について考察した。つまり英語劇を通じて、英語に対する意識の変化、人に対して何かを表現しようとする積極的な態度やコミュニケーション力にどのような影響を与えるのか、アンケートを基に検証した。その結果、子どもたちは英語を話すことに対する姿勢が良くなった。さらに、英語劇づくりを通じて、学級の友だちともコミュニケーションを図ることができ、望ましい人間関係の形成にも効果があった。
② グローバル・マインドを育てるフォト・ランゲージの実践ー外国語活動におけるニジェール共和国の教材化ー	徳富 慎弥 (大阪教育大学)	青年海外協力隊員として活動した経験を活かし、小学校外国語活動において、ニジェール共和国を教材化したフォト・ランゲージの実践を行った。その結果、低学年では身近なものを通して異文化に親しみ、高学年では世界に目を向ける姿が見られたことを報告する。またその驚きが、小学校外国語活動への内発的動機づけに繋がるのかについて考察し、グローバル・マインドを育成するための異文化理解教育について提案する。
③ 小学校外国語活動における評価規準と子どもの気づきを促す振り返りカードについての一考察	高木 保彰 (京都教育大学)	小学校外国語活動における最もよく用いられる評価方法の一つに、「振り返りカード」の使用が挙げられる。振り返りカードを効果的に用いることによって児童の気づきを促すことができるとされている。本研究では、児童の気づきを促すための振り返りカードのあり方について考察したものである。また、英語ノートの各授業における振り返りカードを作る際に必要な各授業における評価規準を提案したものである。

【第4室】(153) テーマ: 小学校外国語活動・リスニング・リーディング		
① 小学校高学年における英語の歌の活用	前田 瞳 (大阪教育大学)	歌を取り入れた外国語活動の良さには、(1)リラックスして英語に耳を傾け、(2)繰り返す中で英語の表現に慣れ、(3)導入や切り替えで意欲を高める(影浦, 2007;中山.2001)等がある。しかし、高学年での歌の導入は難しいという指摘もある。そこで、歌を応用したグループワークのある授業実践を行い、アンケート及びビデオ記録による発話分析を行った。その結果、89%の児童が歌を楽しみ、ほぼ全員がグループ活動も楽しめていた様子を報告する。
② 対話的ランゲージングのEFLリーディングへの効果	今井 亮太 (京都教育大学)	本研究は、対話的ランゲージングのEFLリーディングへの効果を調査するものである。そのため、日本人大学生英語学習者33名を3つのグループ(A:本人の力のみで読み解くグループ・B:本文読解のためのスキヤフオールディングを与えたグループ・C:スキヤフオールディングを与え、必ず声に出しながら解答するグループ)に分け、物語本文とその主題に関する問題を課した。発表ではそれらグループ間に統計的な差はあるのか、またグループCの質的な分析結果について論じたい。
③ 英文テキストの継時処理および保持訓練がディクテーション能力の向上に与える影響	水野 豪人 (京都教育大学)	英文テキストを戻り読みせずに読解し、同時に言語情報を保持する訓練を行うことが、ディクテーション能力の向上につながるのか大学生を対象に実験を行った。週1回の訓練を4週間続けて行ったグループ(グループA)と、週5回の訓練を2週間続けて行ったグループ(グループB)に分け、それぞれのグループについて訓練の前後に行ったディクテーションテストのスコアを比較した。その結果、両グループとも訓練前後のスコアに統計的に有意な差が認められ、スコアの伸び方はグループBの方がグループAよりも大きかった。

ポスター発表

ミニプレゼン (141) 11:20~11:50 コアタイム11:50~12:40

【第5室】(141)

<p>① 日本人英語学習者の音韻認識能力が語彙処理及び L2 オーラル能力に及ぼす影響</p>	<p>山本 貴恵 (神戸大学)</p>	<p>音韻認識能力はリーディング能力を予測する能力の一つとして幅広く研究がなされている。本研究は日本人英語学習者を対象に、(1)英語の音韻認識能力とオーラル能力、ワーキングメモリの相関、(2)英語の音韻認識能力が英語語彙読解に与える影響を調査した。音韻認識能力は音節、音韻、音素レベルに分類し検討する。日本人英語学習者の英語音声の処理と産出、そしてメンタルレキシコンについても音韻処理の観点より言及する。</p>
<p>② PI を活用した 4 技能を伸ばす指導教材の開発 —中学生の基礎力の育成のために—</p>	<p>中川 麻希 (京都外国語大学)</p>	<p>本研究は、英語を学習する中学生が、4 技能を統合的に習得するための文法指導に使用する教材開発である。Processing Instruction(処理指導)は、インプット重視の形式と意味を結びつけて行う文法指導である。形式と意味を結びつける学習に重点を置いた文法指導で内在化を促し、形式に焦点を置いたアウトプット活動をして自己表現につなげるというのが目標である。</p>

【第6室】(145)

<p>① 日本人英語学習者に対する Communicative Framework を活用した発音指導： Forms and Meaning-Focused Instruction の英語語彙強勢への効果</p>	<p>草野 遥 (神戸大学)</p>	<p>今日、外国語教育では、学習者相互による言語活動を中心としてコミュニケーション能力の育成を目指した Communicative Language Teaching が注目されているが、この指導法には「言語形式の軽視」という課題点がある。そこで、本研究では、日本人の中学1年生を対象に、機械的な発音指導と、コミュニケーション活動の最中に適宜形式指導を取り入れるという Focus on form を取り入れた発音指導を行い、英語語彙強勢への効果の比較検証を通して、よりよい発音指導を探求することを目的とした。</p>
<p>② 意図的学習を通じたコロケーション学習の効果 —二語のコロケーションと単語との比較—</p>	<p>南 侑樹 (京都教育大学)</p>	<p>本研究は、既知語と目標語のコロケーションと、目標語のみでの学習効果を比較するものである。Kasahara (2010)の手法を基にトリートメント後、受容語彙と発表語彙の直後テスト、2週間後の遅延テストを行った。結果、受容語彙では Kasahara の実験通りコロケーションの方が点数が高く有意差が見られた。一方発表語彙では直後テスト、遅延テストいずれもコロケーションの方が点数が低いという結果になった。</p>

① Practical Assessments of Speaking Proficiency for Japanese Learners of English

横内 裕一郎
(立命館大学)

Assessing speaking ability is quite difficult and time-consuming work for Japanese teachers of English. In consequence of revision of course of study, high school English teachers have to conduct and manage their class in English. Presumably teaching style will be changed from a grammar-transition method to an oral approach or communicative language teaching more than ever. This change forces Japanese teachers of English to assess their students speaking ability and give them feedback in a timely manner. It is true that using existing external standardized speaking tests is useful to assess students' speaking proficiency. However, such tests have some controversial issues to consider when we adopt as a classroom testing device. Difficulty of the test is the most important factor as a classroom test, and the difficulty of existing speaking tests varies from test to test. In addition, some speaking tests might be too difficult for average Japanese language learners. Under such conditions, a new practical English speaking test, which is entitled the "Oral Proficiency Test" (OPT), accompanied by its criteria for evaluation were developed. OPT consists of four sub-test; read aloud, picture description, story retelling and free speech. The criteria were established in terms of empirically derived, binary-choice, boundary-definition (EBB) scales. The reason why EBB scale was chosen as criteria is EBB is expected to have high inter- and intra-rater reliability. In addition, EBB has very clear multilevel alternatives that are the boundary of test takers' performance. It was thought that EBB might be useful to give students a feedback since the alternatives are made by the actual test takers utterances. Therefore, test takers can realize their weaknesses and strong points of their speaking performances. The primary objective of the current study is to develop a proto-test for OPT for classroom use, and to validate it by comparison to Versant? In addition, inter- and intra-rater reliabilities were also validated. In order to carry out this study, the researcher had 28 college students' collaboration. They took OPT and Versant, furthermore, an English instructor collaborated to validate the inter-rater reliability. As a result, high concurrent validity and intra-rater reliability were observed. Thus, possible application of OPT as classroom English speaking test was suggested. This test will be revised in the near future and the construct validity of the speaking task will be also examined to prove the plausibility of the test.

② 英語自律学習における ICT の効果	南海 未来 (大阪教育大学)	英語教育界において、ICT というものは依然として目新しい存在である。この研究の目的は、ICT を活用することにより学習者の興味を引き、自律性を育てる可能性を模索することである。また、自律学習や自己調整学習については、1980 年代から本格的な理論や研究が始まっており、英語教育においても早くから注目されている。ICT を利用した学習が自律学習へとうまくなれば、今後もっと教育への ICT 利用が期待できるのではないかと考える。英語教育界において、ICT というものは依然として目新しい存在である。この研究の目的は、ICT を活用することにより学習者の興味を引き、自律性を育てる可能性を模索することである。また、自律学習や自己調整学習については、1980 年代から本格的な理論や研究が始まっており、英語教育においても早くから注目されている。ICT を利用した学習が自律学習へとうまくなれば、今後もっと教育への ICT 利用が期待できるのではないかと考える。
----------------------	-------------------	--

【第 8 室】 (147)		
① リーディング指導における内容理解促進を促す発問分析及び開発	古田 理樹 (京都外国語大学)	高校における上位・中位・下位向けの検定教科書を、上位・中位・下位それぞれにおいて while reading(内容理解段階)における発問を、事実を問う発問・推測を求める発問など、どのようなタイプの発問なのかを分析した。次に、果たしてその設問は適切なものか・きちんと内容理解を促進するものと言えるか、など質的な観点からも考察・分析し、最後に教科書では補いきれない内容理解促進のための発問・設問を開発を行った。
② 英語学力不振者の学習意欲を高める称賛の仕方とは	森脇 永至 (大阪教育大学)	現在、多くの学習者が様々な問題を抱えている。その一つとして、学習に対して興味がない、すなわち動機づけられていないことが挙げられよう。将来、教師になる方も現場の先生方も生徒たちを動機づけるということに頭を悩ませているのではなかろうか。では、やる気のない生徒たちにいかに関わっていけばよいのか。この論文では、賞賛に焦点を当て、特に学力不振者と呼ばれる生徒たちを動機づける方法を提案していくとする。

【第1室】(142) テーマ: リーディング指導

① ラウンド制を用いた中学3年生を対象とした教科書指導法	永野 佑樹 (京都外国語大学)	現在の英語教育ではいまだ文法訳読式、前文和訳による授業が主となっており、英語の音声に触れる機会がまだまだ少ない。4技能を統合した英語教育を実践するために、リスニングによる多量のインプットを与え、タスクに答え文章の内容を概要→要点→詳細へと理解していくラウンド制を用いる教材の開発を行う。様々な音読活動を行うことでインプットからインテイク、そしてアウトプット活動につなげる教材を目標とする。
② ラウンド制指導法を用いたリーディング指導—理解を促進する発問の開発—	眞鍋 佳子 (京都外国語大学)	ラウンド制指導法を軸としたリーディング指導により、英文の内容理解を深め、自分で問いを持ちながら読む力を養うために、教師が投げかける発問の有効性に焦点を当てて研究を進めた。教師と生徒とのインタラクションを通して、生徒が英文の理解を深めるために必要と思われる発問を理論に基づいて作成した。
③ 音に焦点をあてたリーディング指導がもたらす中1スピーキング力伸長の効果 —4技能統合した指導とともに—	富藤 賢治 (大阪教育大学)	中1生1学期スピーチ自己表現活動を最終目標として音声インプットと音読に焦点をあてたリーディング活動を行った。附属中1生120名が5月末に電話によるスピーキング能力測定試験(Versant Junior)を受験する。1学期終了後、同テストを再度受験し各生徒にどのようなスコアの変容を調査した。結果、発音、語彙力、流暢さ、文構成力の4観点のうち特に流暢さと文構成力のスコアの伸びが顕著であった。その他、授業実践とどのような因果関係があったのかを考察する。
④ 大学における新しいリーディング指導の一考察 —解読から快読へ—	古賀 眞紀 (京都外国語大学)	実験授業にはリーディングに関する到達目標が設定されており、実験参加者の英語力を引き上げる必要がある。対象は大阪の私立大学社会科系学部1回生の英語成績上位29名である。授業では従来の文法訳読式の内容理解ではなく、内容を正確に理解しつつ、しかも速読につなげるための指導のあり方を考えた。授業の組み立ては、第二言語習得の認知プロセスに基づいてinputとintakeを重視した。

【第2室】(143) テーマ: 認知言語学		
① デジタルメディア教材による可算性の指導 — 認知文法の観点から—	縄稚 勇一 (関西大学)	名詞の可算性 (countability) は、英文法の中で最も難解な項目の1つである。しかしながら、可算性は全ての名詞使用に関係するため、正確な英語によるコミュニケーションを行う上で必要不可欠である。本発表では、可算性指導のため開発した教材を紹介する。まず、可算性理論を認知的な観点から解説する。そして、パワーポイントによる教材開発の過程、および教材の特徴を説明する。最後に、大学生を対象に行われた教材試用の結果を分析し、教材の効果、改善点、今後の課題等を議論したい。
② 英語の現在単純形と現在進行形の認知的分析	佐和 真梨恵 (京都教育大学)	現在単純形は、プロファイルされた状況が発話と共起し、発話と同一の長さを持つことを示す。現在進行形は、境界のある状況からその終始点を除外してプロファイルすることで、その状況を発話時において境界のないものとして示す。本論の目的は、現在単純形・現在進行形で表される一見多様な状況は、それぞれの典型的意味に基づいていることを認知言語学的に分析して明らかにし、よりよい高校英語教育のための提案をすることである。
③ 英語法助動詞-ED 形への認知言語学的視点 — 高等学校で扱われる could, might, would の意味拡張を中心に—	遠藤 久美子 (京都教育大学)	高等学校における法助動詞の学習では、話者の主観的な判断や推測を表す用法 (認識的用法: may=‘かもしれない’等) や、法助動詞の過去形が表す「過去以外の意味」が扱われ、中学校での学習に比べて遥かに複雑である。この法助動詞が持つ「多義性」を認知意味論的視点で捉えると、「-ED 形態素を与えられたことによる意味拡張」という共通のイメージスキーマが抽出される。これによって、法助動詞の意味の分布を視覚的に捉えることが出来るようになる。
④ グラウンディング要素としての英語法助動詞の認知分析: 英語学習者にモダリティを効果的に導入するための提案	鈴木 由里 (京都教育大学)	認知言語学において、法助動詞は時制とともに節グラウンディング要素のひとつとして扱われる。その視点に立つことで法助動詞の本質的機能を明らかにすることができる。また本論文では、法助動詞の用法をより体系的に捉えるために、法助動詞(特に認識的法助動詞)の特徴に関する意味論的研究と認知的分析の橋渡しを試みる。最終的には、これらの議論を踏まえて、モダリティの概念を効果的に使用した指導法について考察する。

【第3室】(144) テーマ: 音声指導		
① 中学校英語教育の入門期におけるフォニックス指導の重要性	鄭 京淑 (大阪教育大学)	中学1年生の英語学習への意欲を持続させるためには、クラス全体で協同学習を行える基礎が大切である。小学校で経験した語彙を入門期に整理して、フォニックスの知識を利用して見た文字を音声に変え、学習した単語の綴りを覚える手がかりを持つことは、生徒たちに安心感を与える。学習者に負担なくフォニックスの知識を偶発的に習得させるには、まず授業者がフォニックスに精通し、その指導方法を習得が必要である。本発表でその方法のひとつを提案する。
② 中学校英語教育における発音記号の活用に関する研究 —フォニックスを発音記号へつなぐ—	藤野 節子 (大阪教育大学)	先行研究から、中学生の英語嫌いの多くは、英語単語が読めないことに起因していることが分かる。この問題に対処するために、英語単語の読みにおいて発音記号の活用に着目した。しかしながら、先行研究では、特殊文字の多い発音記号を教えると、中学生には負担感があるため、さらに英語嫌いを増幅すると述べられている。そこで、本研究では、中学校1年生の英語教育において1) フォニックスにつないだ発音記号は負担感なく指導することが可能であり、2) 発音記号は英語単語の読みに役立つという仮説の検証を目的とする。
③ 小学校外国語活動におけるPhonemic Awareness 育成に関する研究	井上 桃子 (大阪教育大学)	本研究では EFL 環境で英語を学習する日本語母語児童の phonemic awareness の特徴について実践授業を通して分析し、分析結果に基づいて日本語母語児童に効果的な phonemic awareness の指導を提案する。4回にわたって日本語母語児童に対して phonemic awareness の活動を行った。その結果、“Odds to one”“Bugs Game”“Matching Game”“Rhyming Tongue Twister”の活動を行った児童は、行わなかった児童よりも正確に英語の音声を識別できるようになり、その能力は活動から半年が経過しても維持されることが明らかとなった。
④ 英語変種聴解力向上のための英語リスニング教材の作成 —インド人英語と中国人英語—	太白 智子 (関西大学)	現在、第二言語、外国語として英語を使用する非母語話者の総数は母語話者の人数を上回っている。非母語話者による国際語としての英語の発達により、実際に英語を使用する際、非母語話者と英語でコミュニケーションをとることの重要性も増し、また学習者も非母語話者の英語を学びたいと考えている。本課題研究では、このような英語の多様化またニーズを考慮し、非母語話者の英語音声を使用したリスニング教材を作成した。

【第4室】(152) テーマ: 協同学習・リーディング・ライティング		
① 協同学習の研究: ディクトグロスを用いた高校英語授業のイノベーション	高田 哲朗 (京都教育大学)	指導要領が改訂され、英語教育においても、小学校英語教育が本格的に始まり、次いで中学校、高校においても新しい英語教育が始まろうとしている。一方で、学校教育全体には「学びからの逃走」が蔓延しだしている状況がある。筆者は、ここ数年生徒の授業離れに強い危機感を感じており、授業を本来の学びの場に戻すために、OECDのDESECOでも明記されている「協同する力」に着目して、ディクトグロスを用いた「協同学習」を取り入れることにより、授業の改善を図ろうと考えた。
② マクロな読みの力の育成を目指したピアサポート・リーディング教材の開発 - A bridge over troubled reading -	森 陽子 (関西大学)	中学校においてリーディングと言え、音読・精読が中心で「まとまりのある英文を読む指導」はほとんど行われていない。読むことは書き手と読み手のコミュニケーション活動であるという認識を新学習指導要領のもとで捉えなおす必要があると考える。従来一人で言うリーディング活動をいかに活性化し、リーディングの力を伸ばすかが課題である。その方法として仲間と共に読むピアサポート・リーディングを提唱し、それを盛り込んだ教材を開発した。
③ 大学生に対する Prewriting 活動の効果 Hierarchical Concept Mapping と Clustering Mapping の比較	秋永 真由子 (大阪教育大学)	本研究では、大学生が Prewriting 活動として Hierarchical Concept Mapping か Clustering Mapping のいずれかを使用し英作文を書いた際に、その活動が作文にもたらす変化を調査、分析した。事前事後調査を比較すると、その Prewriting 活動の有無が作文の点数に影響を及ぼすことはなく、また、統計上顕著な有意差も見られなかったが、一方で2つの発見があった。一つ目に、作文の構成が螺旋を描くような曖昧なものから、直線的で明白なものへと変化したことであった。二つ目に、支持する考え(Supporting idea)の数が増えたことであった。
④ 協働英作文課題における辞書使用の会話への影響	富和 由有 (University of Warwick)	協働学習の効用について多くの報告があるが、負の知識転移等、課題も指摘される。辞書は、学習者達だけでは困難な問題解決を助け得るが、協働英作文においてはどのような影響を与えるか。本稿は、日本人大学生8名の協力の下、協働英作文中の会話、刺激再生法インタビューコメントを分析対象とし、1) 問題解決における辞書使用の効果、2) 辞書使用による会話量への影響、3) 辞書使用に影響を与える要因を調査した。辞書は学習者の問題解決を助け、また会話への影響には学習者の性格や課題への態度も関与することが分かった。

【第5室】(153) テーマ: リーディング・心理言語学

<p>① The Role of Portfolio Assessment for Promoting Autonomy with Extensive Reading Activity</p>	<p>永田 舞 (大阪教育大学)</p>	<p>この研究では、ポートフォリオ活動が学習者の自律的な成長を促す可能性について検証した。参加者は授業外で多読活動を約3ヶ月間行い、同時に学習記録をポートフォリオに蓄積していった。その間、研究者は学習記録に対するフィードバックと、進捗状況を訪ねるための個人面談を二度行った。自律という観点から参加者の情意面・行動面を分析し、学習者がより自律的になるために、ポートフォリオというものがどのように貢献し、どのような役割を持つのかを、修正版グラウンデッドセオリーを用いて明らかにしている。</p>
<p>② 日本語と英語の読解能力に関する相関分析</p>	<p>小比賀 豊 (関西学院大学)</p>	<p>本研究は、成人の日本語母語話者に対して読解能力テストを実施して、日本語と英語における読解能力の関係を調査した。第一に、日本語と英語の読解能力に相関があるのかを検証した。第二に、両言語における読解能力の相関に対して、英語の熟達度には、閾値があるのかを検証した。第三に、英語の熟達度が上がれば、両言語における読解能力の相関が強くなるのかを検証した。最後に、性差が両言語における読解能力の相関の強さに関係しているのかを検証した。</p>

<p>③ The Relationship between Working Memory Capacity and L2 Learners' Lexical Inferencing Ability and Their Strategy Use</p>	<p>高橋 太郎 (関西学院大学)</p>	<p>The present study investigated the relationship between L2 working memory and L2 learners' lexical inferencing ability and their strategy use. The previous studies assume that lexical inference is a multi-level activity, which requires efficient use of working memory. However, there had been few studies supporting this assumption. This study sought to find out whether this assumption would be valid.</p> <p>In this study, twenty-four Japanese EFL learners participated in the experiment and took a lexical inference test and a reading span test. During the lexical inference test, an introspective think-aloud protocol was used to reveal the types and frequencies of lexical inferencing strategies used. The reading span test (Osaka, 1998) was used to measure the participants' L2 working memory capacity. The first analysis showed that there was a moderate relationship between working memory capacity and lexical inferencing ability. It can be suggested that lower-level processing for readers with high working memory capacity was automatized so that they could allocate their limited cognitive resources to successful lexical inference, which was a higher-level processing. In contrast, readers with low working memory capacity consumed cognitive resource in lower-level processing, and not enough cognitive resources were left to guess unknown words.</p> <p>The second analysis revealed that working memory capacity had a significant relationship with frequencies of specific higher-level lexical inferencing strategies, self-inquiry and verifying strategies. High working memory readers used self-inquiry strategy more while guessing unknown words. On the other hand, low working memory readers used verifying strategy more, but they did not benefit from the use of the strategy. These findings suggested the importance of improving working memory capacity or promoting more efficient use of working memory in order to make successful lexical inference in L2. The hypotheses of the present study are partly supported. L2 working memory capacity is related to lexical inferencing ability and lexical inferencing strategy types. These results confirm those of the post studies in L2 reading comprehension concerning the role of working memory capacity in lexical inference.</p> <p>Lexical inference requires a simultaneous activation of multiple processing operations from lower-level processing to higher-level processing. Previous studies suggest that efficient lower-level processing saves cognitive resources in working memory for higher-level processing including lexical inference. Therefore, effective use of working memory capacity through automatization of lower-level processing can be one of the important factors which contribute to successful lexical inference.</p>
---	---------------------------	--

④ Recall Processing of Formulaic Sequences Based on Different Levels of Knowledge	アラル ケンザ 宝 (University of Nottingham)	本研究では、母語が英語ではない被験者が英語の語彙やフレーズを記憶から引き出す際に、それらの語をどのくらい知っており、使えるかといった知識の深さが与える影響を、聞き取りテストを用いて実験した。さらに、語を記憶から引き出す際に影響しうる様々な内的・外的要因の中から、今回は被験者の記憶力、語彙量、またコーパスを用いて聞き取りテストでターゲットとなった語の頻出度がどのくらい影響を与えるかといった実験も行った。
---	---	--

【第6室】(154) テーマ: 異文化理解・学習者中心の授業		
① スウェーデンにおける小学校英語教育の一考察	片山 智洋子 (大阪教育大学)	スウェーデンの小学校でフィールドワーク研究の結果を元に、現地でどのような英語教育が行われているのかを、スウェーデンの教育システムを始め、英語教育におけるカリキュラム・教育目標・指導目標・教授法・教科書分析や国際理解教育の点に関して日本とスウェーデンの相違点を分析し、その結果を元にスウェーデンの教育が日本の英語教育において示唆できる点を考える。

<p>② A Study on China English in the Historical and Present Perspectives</p>	<p>鄭 郁 (神戸大学)</p>	<p>Starting with the description of the rapid growth of English as a lingua franca (ELF) and the introduction of ‘World Englishes’ and ‘English as an International Language’ (EIL) in the field of English Language Teaching (ELT), in this study the author focuses on China English ? a member of the ‘World Englishes’ family.</p> <p>For many years, the standard varieties of British and American English have been accepted and promoted as the only internationally acceptable forms of Standard English, a view that has however, in recent years, been challenged in studies associated with ‘World Englishes’ and EIL. Within such frameworks, some linguists in China have already proposed that ‘China English’ as an actual or potential standard variety should stand alongside the standard varieties of British, American, and other Englishes. China is developing and changing so rapidly in these years. Since the introduction of ‘China English’ by a Chinese scholar, Ge (1980), have there been any changes in the university teachers’ and students’ attitudes towards ‘China English’? What are the current university teachers’ and students’ views on ‘China English’? What kind of work is needed to be done for ‘China English’ to become a standard variety, or a pedagogic model in China?</p> <p>In order to investigate Chinese teachers’ and students’ views on these matters, a questionnaire survey is undertaken with subjects from a university in mainland China. A similar, supplementary survey for Japanese university students is also conducted in a Japanese university for comparison. In Chapter 5, the empirical data from ten questions in each survey is gathered and analyzed carefully. The overall findings in this study show some quite optimistic views on ‘China English’, especially from the teachers. Though some findings are disappointing to the author’s expectations, he believes that ‘China English’ is gradually on its way to becoming another World Englishes variety, when it has been adequately described, codified and officially recognized in the near future.</p> <p>The study concludes with the necessity of more future researches done in the field of World Englishes. Investigations similar to the present one could be expanded to explore teachers’ and students’ awareness of more varieties of English in the Outer and Expanding Circle countries rather than being limited to China. Accordingly, the author would like to look into situations in other Expanding Circle countries such as Japan and South Korea, if possible, including North Korea, and compare those varieties from their historical and present perspectives.</p>
--	-----------------------	--

<p>③ 異文化理解を促進または阻害する要因 —英語科において高校生を異文化理解に導くための提案—</p>	<p>中野 利香 (大阪教育大学)</p>	<p>異文化理解の現状を調査するため、高校生 221 名、大学生 112 名を対象にアンケート調査を行った。異文化に対しては 75%以上が「興味がある」と答えたのに対し「高校英語科で異文化について学んでいる/いた」との回答は半数に達しなかった。異文化理解の度合いに影響を与える要因として、海外経験、カルチャーショック、英語好きが挙げられた一方、自己認識や学校での異文化理解教育は関連がなかった。これらの結果に基づき、高校で取り入れるべき教育活動についての提案を試みる。</p>
<p>④ What Is Learner-Centeredness?:A Teacher's Reflective Inquiry and Study of Learner-Centeredness</p>	<p>勝部 恵美 (神戸市外国語大学)</p>	<p>リフレクティブ・プラクティスの実践を通して、学習者中心主義の定義付けを目指し、取り組んだものが本研究である。先行研究、知識伝達型教育との対比、既存の教授法、教育界以外の提唱も概観した上で、自身のジャーナルライティングをデータとし、C.R. ロジャーズの I-Thou-It モデルによる分析を行っている。この分析をもとに、「学び」そのものについてと「学習者」についての考察、そして学習者中心主義の定義付けを行った。また、本研究は、自身の教育実践を研究の対象とするティーチャー・リサーチャーとしての記録でもある。</p>